

20250214 ～探求学習の取組～ 一中の研究発表会に参加して（２）

小平第一中学校の研究発表会報告の続きです。

私にとって、最も刺激的だったのは、栗林校長先生がコーディネーターとなつてのシンポジウムでした。そこでは、私立の中高一貫校の副教頭先生、教材開発会社の役員の方、教育でのICT活用を推進する会社の取締役の方、第２学年担当の先生の４名がパネラーでした。

そこで語られた言葉をご紹介します。

◇『PBL※（プロジェクト・ベースド・ラーニング）ってよく言いますが、私たちはこの『P』は、Projectではなく、Passion（情熱）の『P』と呼んでいます』

※ PBLは文科省の提唱するアクティブ・ラーニングの手法の一つ、PBLは問題解決型ともいい、SBL（科目進行型）と対比されます。

◇「探求についていろいろ言われますが、つまりは『！』と『？』を行ったり来たりするんですよ。いきなり『問い』ではなく、最初の『！』を大事にした上で『？』が来るんです。」

◇「自分自身の疑問からスタートするんです。」

◇「課題解決はみんなA！がやってくれるんですよ。これから大事なのは課題発見の力です。」

◇『『本気の探求』に導くには、入口が大事！入口で本物を見せる、本物と出会わせる！』

何だか、私たちが研究で

「え～っつ！」「何だろう！」とこどもが前のめりになる姿を目指し、

「こどもの学びに火をつけよう！」

と、工夫し取組んだこと、そのものではないかと思えてきました。

発表会の最後の謝辞で、栗林校長先生が語っていらっしゃいました。

「2年前にこの研究を始めようと決めたきっかけは、『危機感』からでした。」

「探究的な学びを通して、主体的に学び行動する人間を育成していこうとしている世の中にあって、本校は大切な生徒たちに本当に必要な力を付けさせてあげられているのだろうか。」栗林校長先生のこの言葉は、これまで通りを続けていけばいいという姿勢に対する大きなアンチテーゼでもあります。

「危機感」からスタートしているといえば、本校の研究をスタートした動機も「危機感」でした。この国に実に近い未来に不可逆的危機が訪れるかもしれないという「危機感」です。今、普通に感じている「あたりまえ」が、ぼろぼろと崩れていく「危機感」です。商店に庶民が手の届く価格で食品が並ぶ、水道の蛇口から安価な飲める水が出る、そんなあたりまえが、昔の話になってしまう未来がすぐそこに迫っているように感じるのです。

何度も発信しましたが、この国の農業従事者の平均年齢は約70歳です。あと10年この人たちは、いよいよ厳しさを増す炎天下の下で田畑を耕し続けてくれるでしょうか。もう食糧は輸入に頼るしかないとなったとき、片や世界に目を向ければ、人口はどんどん増えているのです。しかも、主力の小麦は温暖化にとっても弱い作物です。今後減収が予想される作物なのです。さらに、想定を超える異常気象が世界中で巻き起こります。世界中が急速に自国民ファーストにシフトする中で、わずかに流通する穀物の争奪戦に、この国は生き残れるでしょうか。釣りあげ続けられるであろう穀物の国際取引に、この国の庶民の財布はどこまでついていけるでしょうか。

そうした、未来が実に容易に想像できてしまう、3つのイスを10人で争うような熾烈な

未来になりそうだから、だからこそ3つのイスを何とか10人で分けあえないか、支えあえないかと「一人も取り残さない」絆をあらゆる人と強く深く結ぶことを、教育を通じてつくっていくことを本校は目指したいと思いました。さらには、その絆と知恵で3つのイスを4つ、5つと増やしていく逆転の一步を踏み出す優しく、賢く、逞しいこどもたちに成長して欲しいと願いました。

「危機を知って」「危機に立ち向かう人や取組を知って」「できるところから行動する」「より多くの人とあたたかく繋がっていく」

そうした、「みんなで危機に立ち向かう」「助けあうのがあたりまえ」をさらに前にすすめていく学びを地道に展開していきたいですね。

何のために国語を学ぶの？算数を学ぶの？何のために漢字の練習をするの？何のために朝の会をするの？何のためにそうじをするの？何のため？何のため？と問うた時、

「立派になってさ！」

「もっと優しくなってさ！」

「みんなで明るい未来をつくるためだよ！」

「こうして頑張ることがみんなの明るい未来につながっていくんだよ！」

と胸を張って答え、日々前進し続けるこどもに育てたいです。

やはり、教育の使命は、はかりしれないと思います。